

「戦いごっこ」における遊びの流れを規定するもの②  
 — 内的ルールの生成過程を巡って —

小林 紀子  
 (東京学芸大学)

【はじめに】

従来のごっこの研究は、保育の場や状況との関連で論じられたものは少ない。しかし、ごっこを論ずるに当たって保育の場や状況を切り離すことはできない。それは、以下の理由による。小川博久らは、ごっこに於いてはゲームのルールのように「もし…ならば、…する」という命題的なルールは存在しない、故に、ごっこの参加者同士が見立てを随時相互に了解していく必要があるとしている。その際、保育の場や状況との関係の中で新たな見立てが起こり、その見立てを随時相互に了解しながらごっこの遊びの流れが生じていくからである。そこで本研究では、いつ本気の戦いとなるとも限らない為、相互了解が難しいと考えられる「戦いごっこ」に視点を当て、幼児自ら繰り広げるごっこの場面を保育の場との関連で観察、記録した。「戦いごっこ」に於いては、時としてその教育的意義について議論的となる。しかし、本研究に於いては、仲間同士その関係を保ちながら見立てを相互に了解していく暗黙のとりきめがあるのではないかと考え、これを「内的ルール」と規定した。本研究で見出した「内的ルール」は、「A：仲間同士は敵対味方となって戦わない」「B：仲間外(準仲間)は敵対味方となって戦う」である。この「内的ルール」がごっこの遊びの流れを状況性豊かな方向へと規定していることは、第47回保育学会に於いて発表した。この「内的ルール」は、まさに、場や状況との関連の中で協働的に生成されていくことが明らかとなった。

【研究方法】

対象：援助との関連が浮き彫りとなる対象児を選択した。トラブルが多くなかなかごっこに参加できないK園年長児U。観察方法：対象児が登園後遊び始め、保育者の指示等により遊びを終了するまでの一連の言動及び、それに付随して対象児の周辺の幼児や保育者の言動、保育の流れを自然観察法により観察、記録(フィールドノート、VTR)。その他：園内研への参加

【研究内容】

トラブルの多いUは、保育者がUとの関わり方を交えることにより、周囲との関係が変化していった。そのため葛藤することとなったが、その中でUを支える他者が出現して新たな関係が構築され、その結果、以

下のように「内的ルール」が機能していった。

1. 「関係の仕切り直し」 — 年中組から年長組へ —  
 年中組11月、Uは「特に個別の援助をしている子ども」として指導計画に次のように記されている。Uの状態「友達と遊びたい気持ちがうまく表現できないために、たいたい大声で叫んだり、友達の物を取ってしまったりしてトラブルになることが多い」保育者の援助「Uの気持ちが友達に伝わるよう保育者が仲介して気持ちを代弁したり『ごめんね』が言えた時にはおおいに認め…」「保育者が仲介して気持ちを伝えたり、かかわり方がわかるようにしていく」この援助の在り方は、一方でUの存在を際立たせることとなったのではないかと推察する。つまり、トラブルが生じると「保育者に頼る周りの幼児」と、トラブル場面での「関係調整に忙しい保育者」と、その関係の中で「変わらないU」の存在である。

しかし、年長組になったUは「遊びの中でトラブルになっても自分達で解決」する状況におかれた。その背景に保育者がトラブルを経験することの意義を捉えていたこと、保育者が幼児の成長を感じ幼児同士に任せようと方向変換したことがある。

2. 葛藤の中で新たな関係構築 — 年長組 —

上記のように、保育者による方向変換の中で「関係の仕切り直し」がなされた。そのことは、Uのみならず周りの幼児、そして保育者に於いても変化を及ぼすこととなり、次のように葛藤する姿が見られた。

- (1) 保育者に気持ちの代弁をしてもらえないU：保育者に気持ちの代弁や手助けをしてもらえなくなったUは今までと違う関わりに戸惑い葛藤する姿が見られた。
- (2) トラブルは自分達で解決せざるおえない周りの幼児 幼児達の成長を感じトラブルを経験することに意義を見出す保育者の元で、Uを取り巻く周りの幼児達は「トラブルは自分達で解決せざるおえない」状況に置かれることとなる。自分達で解決しようとするものの、なかなか解決できず葛藤する姿が浮き彫りとなった。
- (3) 幼児に対して気持ちと言動に葛藤が見られる保育者 保育者は方向変換を試みるものの、眼前の幼児の姿や状況に左右され一様に変えることはできない。そこ気持ちと言動に葛藤する姿が見られた。このような状況の中、Uを支えるS、M、E達が出現していた。

### 3. UとUを支える他者間で「内的ルール」が機能していく過程

年長6-12月

Uは、保育者が「関係の仕切り直し」をすることにより、Uを支える他者（S、M、E達）との関係を核としながら周りの幼児達との遊びに参加するようになっていった。それに伴い、UとUを支える他者間に「内的ルール」が機能していくこととなった。

(1)保育者が状況を共有することによる関係の変化と新たな「相互了解」

事例：6月2日

Uは、S、M達と積み木で家を構成する。しばらくしてS達に戦いを挑む。S達は結束して戦う。Uはその場から出ていき、再び戻ってくる。

①S：「違う所であそぼう」と言い、廊下へ行く

②U：作った武器を手に廊下へ行く。

③S：Uを見て戦いを挑む。

④U：「お前達、おれ仲間だぞ、仲間って言うてるの」とSと戦いながら言い、武器を投げる。

⑤S、M：武器を投げるふり（実際は投げない）

⑥U：「仲間だろ」「剣作ってこよう」と言い、保育室へ行く。

⑦保育者：「また剣作ってこようって言うてるよとんできて嫌じゃないの？ 胸が痛くなっちゃう

⑧U：戻って来て、武器を投げようとする。

⑨S：「やめろ！」

⑩U：Sが言うのを聞き、やめる。

⑪M：自分の武器の横棒をぐるぐる回し「あっUおもしろい、空をとんでおもしろい、Uもこれをやればいい。面白いぞ」

⑫U：武器をMのように組み替え回して「おー」その後、Uが武器を頭の上のせ「タケコプター（ドラエモンの）」と言ったことから、S達も同様に頭にタケコプターをのせ3人で探検に行く。

S達は敵となって戦ったUを仲間外とみなし、「内的ルールB」を機能させようとしている。一方、Uは言葉では「内的ルールA」を機能させようとするものの（④⑥）、体の動きは「内的ルールB」を機能させて戦っている（④）。従って、「内的ルールA、B」共る機能せず、Uは戦いのふりではなく本気で戦うようになっている。この時、保育者はその場の関係を捉え何とかその関係を仕切り直したい気持ちを言葉で表している（⑦）。幼児と状況を共有していた保育者が葛藤しながら発した言葉でもある。この言葉をきっかけとして新たな見立てが相互に了解されている（⑫）。

### (2)UとUを支える他者による新たな「相互了解」

事例：11月4日

U、Eはブロックでロボットを構成している。Uはロボを手に「ウフフフフ」と言いながらEのロボに戦いを挑む。Eが「何だよ」と言い手でよけ、Uのロボに当たる。Uは「あー何だよ、こわれたこわれた」と言い、Eにブロックを投げる。

Eは「それ、なしー」「戦うのなしにしようよ」～二役（顔は悪者、体は善者）になるU～

①U：「ビビビビ、顔は敵なの、顔は敵なの、ビビビ」と言い顔のブロックを1つはずして投げる。「ウフフフ、さっき投げたあいつを尾行してたのね、ビービービー」

②E：「あいつを倒してこい」

～二役（兄ロボ、忍者ガンダム）になるU～

③U：「お父ちゃん、あっちに忍者ガンダムだっ行ってみよう。ププププ、こっちから聞こえてくるのね、ここの所にいたのねププププどこにいるって言って」と兄ロボを手に言う。

④E：「どこにいるんだ、でてこい！」

⑤U：「アハハハハハハ、無敵だ、忍者ガンダムだ」と言い自分で箱に隠しておいたロボを出す

⑥E：「お前が改定の忍者ガンダムなの？」

⑦U：「ねえ、まだ早いから巻き戻しする」と言いロボを箱に戻し、兄ロボを手に忍者ガンダムロボ探しを再現する。

UがEに戦いを挑むもののEは応じない。ブロックの投げ合いとなりかねない状況の中でEは、仲間同士は戦わないことを提案している。その後、Uは敵・味方の二役を自分で演じEとは戦わない。このことからUはEとの関係の中で、Eが提案した「内的ルールA」を受け入れ機能させていったことが考察できる。

【まとめ】

・保育者がそれまでの関わり方を変換したことから「関係の仕切り直し」がなされ、各々が葛藤を経験することとなった。しかし、各々の葛藤場面において、その状況を共有する相手（支える他者）が現れ新たな関係を構築する姿が見られた。その中でUとUを支える他者間で見立てが相互に了解されるようになり、「内的ルール」がその関係の中で機能する状況が生じていった。・「内的ルール」は保育者が与えたルールではなく、幼児が仲間関係を保つための必然性から協働的に生成したルールである。このルールが、ごっこの遊びの流れを状況性豊かな方向へと規定していた。